

Ⅲ 平成23年度調査結果のまとめ

1 総合的にみた結果

(1) 全国平均値との比較からみた結果

- 総合的な体力の状況からみると、小学校、中学校で男女とも全国平均をやや下回るものの、高等学校（全日制）では、男女とも全国平均を上回っている。
- 校種別にみると、全国平均を上回る項目の割合は、小学校では約31%、中学校では約41%。高等学校（全日制）では約87%となり、小学校では、前年度から減少した昨年度並みで、中学校では昨年度の67%を大きく下回った。高等学校では昨年度を下回ったもののこれまでと同様全国平均を上回っている。これまで同様、小学校から中学校に進むと全国平均に近づき、さらに高等学校に進むと全国平均を上回る傾向は今年度の結果からも見られる。
- 項目別にみると、「長座体前屈」が男女ともに多くの学年で全国平均を上回っている。また、女子においては、「上体起こし」「50m走」「ボール投げ」も、多くの学年で全国平均を上回っている。
- 小学校男女、中学校男子において、全国平均を下回る項目が多い。今年度は、中学校男子にその傾向が強く見られる。
- 小・中学校の男女とも、「握力」で全国平均を大きく下回っている（ここ数年「握力」に課題が見られる）。
- 小・中学校の男女とも、「20mシャトルラン」「持久走」で全国平均を下回っている。

(2) 平均値の年次推移（S60～H20）からみた結果

- 小・中学校男女ともに、ここ数年、多少の高低は見られるものの下げ止まりの傾向が見られる。
- 男女ともに、依然S60年頃に比べ低い。特に男女の「持久走」、女子の「ボール投げ」でその傾向が強く見られる。

2 校種別にみた結果

<小学校>

(1) 全国平均値との比較

- 今年度は高学年よりも低学年で全国平均を上回る項目の割合が多い。
- 女子の「上体起こし」「長座体前屈」は、全国平均を上回っている学年が多い。
- 男女ともに総合平均は、多くの学年で全国平均を下回っている。
- 男女の「握力」、男子の「50m走」「立ち幅とび」「ボール投げ」は、全ての学年で全国平均を下回っている。
- 女子の「20mシャトルラン」「50m走」「立ち幅とび」は、多くの学年で全国平均を下回っている。

(2) 平均値の過去5年間の推移

- 男女ともに、多くの項目で若干の低下、上昇は見られるもののほぼ横ばい状態となっている。
- 男女とも低学年を中心に「上体起こし」「20mシャトルラン」で緩やかな上昇傾向が見られる。
- 男女とも「握力」は低い状態で停滞している。
- 男女とも「ボール投げ」でここ3年間で低下傾向が見られる。

(3) その他

- ・総合判定の分布割合を見ると、男女とも1年生から5年生において、A判定が10%程度いるのに対してE判定も10%程度いる。

<中学校>

(1) 全国平均値との比較

- 男女ともに総合平均が、どの学年でも全国平均をやや下回っている。
- 男女の「長座体前屈」「ボール投げ」、女子の「50m走」は、全ての学年で全国平均を上回っている。
- 男女の「握力」「反復横とび」、男子の「20mシャトルラン」「立ち幅とび」、女子の「持久走」は、全ての学年で全国平均を下回っている。
- 全国平均を上回る項目の割合が、昨年度から大幅に減少した。

(2) 平均値の過去5年間の推移

- 男女ともに、多くの項目で若干の低下、上昇は見られるもののほぼ横ばい状態となっている。
- 中3男女の「上体起こし」で上昇傾向が見られる。
- 昨年度まで見られた男子の「反復横とび」での上昇傾向が低下に転じた。

(3) その他

- 総合判定の分布割合を見ると、男子では学年が進むにつれ、AおよびB判定の割合が増え、DおよびE判定の割合が減る傾向が見られる。

<高等学校>

(1) 全国平均値との比較

- 全日制男女ともに総合平均が、全ての学年で全国平均を上回っている。
- 全日制男女とも、全ての項目、全ての学年で全国平均を上回っているか、ほぼ全国平均並みとなっている。
- 定時制男子の1・3年生で、ほぼ全ての項目で全国平均を下回っている。

(2) 平均値の過去5年間の推移

- 男女ともに、全ての項目で若干の低下、上昇は見られるが、ほぼ横ばい状態となっている。

(3) その他

- 総合判定の分布割合を見ると、男子では学年が進むにつれ、AおよびB判定の割合が増え3年生では70%を越え、DおよびE判定の割合が減り3年生ではE判定が0、5%と非常に少なくなっている。

3 本県児童生徒の体力の特徴と指導の方向（考察）

- (1) ここ数年、小学生の段階から、比較的「柔軟性」や「敏捷性」は優れ、素早く巧みに動くことができる児童が多いと言える。小学生は、この時期に特に高めたい「体の柔らかさや巧みな動き」を身に付けていると判断できる。
- (2) 全国平均を上回る項目の割合は、小学校、中学校、高等学校と、学年が進むにしたがって増える傾向が定着している。よって、今後、小学校において、教育活動全体を通して、運動遊びなど結果として体力向上につながる取組、楽しみながら運動習慣を身に付ける取組を一層充実させ体力向上を図ることで、中学校、高等学校においても、一層の体力向上を図ることができると考えられる。
- (3) 小・中学校、高校を含め、男女とも多くの学年の「握力」が、全国平均を下回る傾向がここ数年見られることから、今後、小学校低・中学年では運動遊びの中に、筋力アップを図る要素を取り入れ、小学校高学年から中学校では、握力を含めた全身の筋力アップを図るトレーニングを工夫するなど、意図的な取組を行う必要がある。また、測定器具の点検、正しい測定方法の確認を行う必要がある。

- (4) 小学校では男女とも、E判定の児童の割合が、中・高等学校と比べ多く、どの学年においても10%程度見られる。今後、こうした児童に対する継続的な個別指導が必要である。

IV 今後の取組

1 教科の体育の授業はもとより、日常生活における運動実践の場を充実させる

- ・生涯スポーツの基礎づくりと体力の向上を目指し、学校・家庭・地域社会における体育的実践を通して、自ら進んで運動を実践する習慣を身に付けることができるようにする。
- ・小学校では、仲間とともに楽しみながら多様な運動経験をすることに重点を置き、教科体育や体育的行事等との関連を図った日常的な運動実践の場の充実を図る。
- ・中学校や高等学校では、上記の小学校の取組に加え、運動部活動へも意欲的に参加できるようにし、活動に充実感がもてるよう運営方法や指導方法について工夫する。

2 運動に親しむ資質や能力を育て、体力の向上を図る

- ・児童生徒の発達段階と運動の特性を踏まえ、児童生徒が運動技能を身に付け、仲間と一緒に運動する楽しさや喜びを味わうことができるようにする。
- ・児童生徒の発達段階に即した適切な運動の機会を計画的・継続的に位置付け、体力の向上を図るようにする。

3 体力が低い児童への個別指導の充実を図る

- ・小学校で見られる体力状況の二極化傾向と体力が低い児童の固定化傾向に対応して、全校的な取組の充実と共に、継続的な個別指導についても充実を図る。

参 考

〈テスト項目と体力評価〉

テスト項目	体力評価	テスト項目	体力評価
握力	筋力	シャトルラン又は持久走	全身持久力
上体起こし	筋力・筋持久力	50m走	スピード・走能力
長座体前屈	柔軟性	立ち幅とび	筋パワー
反復横とび	敏捷性	ボール投げ	筋パワー・投能力・巧緻性

〈標準偏差（SD）〉

標準偏差とは、データから平均値を基準にして、集団の散らばり具合を示す度合いである。標準偏差が大きい場合は、その集団の散らばりが大きく異質集団であるといえる。その反対に標準偏差が小さい場合は、集団の散らばりが小さく等質集団であるといえる。

〈Tスコア〉

個人の記録を比較し、集団の中で相対的な位置を知ろうとする場合、異種目の比較や同一種目であっても異単位な場合の比較が可能な方法が必要である。その代表的な方法がTスコアである。

Tスコアは、集団の平均を50点にし、そこから標準偏差の1倍離れたものを40点と60点に、2倍離れたものを30点と70点に換算した数値である。